国際大会を連覇した頃の雑古哲夫

れは困ったな」と思いましたが、唯一、必殺技があったんです（笑）。実は、「斜打」という技の特殊な形の技を開発していました。長年、日本拳法をやってきて、斜打というのは大変重いパンチに改良することができることを知っていたからです。振り下ろすようなパンチに加えて、自分の体重を全て移して打ちますと、大変重いパンチに変わります。私にはその斜打に自分で改良を加えてさらに重たくした必殺の斜打がありました。相手は「いつでも来いよ」という感じで余裕でした。そして彼から突いて来た、その時、それに合わせて、カウンターで必殺の斜打。うまい具合にアゴのあたりにとても効く角度から当たりました。そうしたら120kgの彼がドーンと倒れました。嬉しかったですよ（笑）。

◆母校へ

大阪体育大学で体育の教員免許を取った後は、中学の先生を5年間やりました。3年間中学の教員をすると、大学院で勉強させていただける制度がありましたので、その制度を利用して兵庫教育大学大学院に行き修士課程を修了し、中学の教員を辞めました。給料は少ないですが、大学の非常勤講師の道を選びました。そうしている間に関西大学に、常勤として採用していただくことができ、現在に至っております。

関西大学の教員になってからは、日本拳法の授業を担当していましたが、今年はセルフディフェンス（護身術）という形で日本拳法の授業を開講しています。

――今は大学でも指導されていますか。

雑古　拳法部の監督は、私が1年の時に4年だった先輩の藤川良典さんがされていますので、私もお手伝いします。あと、昨年まで12年間くらい近畿大学にも非常勤講師として行っていたのですが、そこで、日本拳法部を作り、男女ともに全日本拳法学生個人選手権大会優勝者を育てました。つい最近までは体育が必修でしたので、いろいろな大学に行って日本拳法部のない大学へ日本拳法の普及も兼ね非常勤講師で出講しようと考えていましたが、今は体育が選択科目となってしまいましたので、それができなくなってしまいました。

◆「愛」の想い出

――日本拳法を続けてきて苦しかったことはありますか。

雑古　一番苦しかったのは、文字通り学生時代に先輩に首を絞められたことです（笑）。本当に苦しかったです。転がされて、ヒザをグリグリ首に押し込まれました。外から見たらいじめに見えたかもしれませんが、私は先輩の後輩に対する「愛」だと思っていました。本当はいじめられていたのかもしれません（笑）。ヒザを押し当てられて苦しいから大暴れしました。その時、普段では出せない力が出せるのです。このように火事場の馬鹿力をいつでも出せるように、昔はそういうふうにしてしごかれていました。毎日毎日死ぬ思いでした（笑）。そうやってしごかれても、いつもしごいてくれる先輩のところに一番に練習に行ったものです。「十発殴られても今日は一発当たった。明日は二発当たるように頑張ろう」と思ってがんばりました。とりあえず自分より強い人のところに稽古をつけてもらいに毎日行きました。

◆拳法が役立った時

――先生は日本拳法の技を試合以外でも使ったことはありますか。

雑古　多少あります（笑）。中学校の教員をしている時、サッカー部の顧問を任され、試合で他校に行った時のことです。試合の合間に手を洗っていたら、その学校の生徒が上の階から物を投げてきたのです。ハッと上を見たら、服装髪型ともに、いわゆる不良の生徒が「何見とんねん。今からそっち行くからそこで待っとれ」と、いろいろ文句を言って降りてきたと思ったら、木刀を振り回してきたんです。私はトントントンと後ろに下がって、ビューンと振って来た後にスッと中へ入って、得意の投げ技で転がし押さえつけて「お前何考えてんねん。こんなことしていいと思ってるのか！」と言いました。そうしたら「わかりました。ごめんなさい」と言ったので放したら、また木刀を拾って、今度はさっきより速いタイミングで振り回してきたんです（笑）。それで前と同じ要領で中に入って転がしたら、そこの学校の生活指導の先生が来たので、その生徒を引き渡し、それで終了となりました。その時は武道をやっていて良かったなと思いました。

◆師・先輩への感謝

――先生が影響を受けた先生や先輩はいらっしゃいますか。

雑古　一番影響を受けたというか、今の私があるのは関西大学第一高等学校拳法部顧問の西山孝一先生のおかげです。試合に負けた時、先生の所に話をしに行きました。その時「人間だから勝つ時もあれば負ける時もある。ただ勝たねばならないのは自分自身だ」と言われました。今でもそれが一番大切だと思うし、その気持ちは忘れてはいけないと思っています。生きていれば何かに負けそうになることがいっぱいあります。もしかしたら今の私は負けっ放しかもしれませんが（笑）。例えば走っていて究極に疲れた時。もうこれ以上走れないと感じたら、「あと十歩なら走れる」と頑張ります。十歩走ったら「もう八歩は走れる」という感じで、苦しい時にこそ、どこまでも自分にムチを打ち、自分に勝つことの大切さを顧問の西山先生に教えてもらいました。

また、先輩では現在、関西大学拳法部の監督をしておられる藤川良典さんに鍛えていただきました。大学の1年と4年の関係で、当時は口をきくのも恐ろしいというような感じでしたが、私の高校時代にも、大学での練習後に高校へよく練習をつけに来ていただきました。苦しい時にこそ頑張るという、「火事場の馬鹿力」を身につけることができたのは、藤川さんに毎日、毎日練習をつけていただいたおかげだと思っています。

◆今後

――今後の目標を教えてください。

雑古　広く日本拳法の指導・普及をすることです。日本拳法とは何かと聞かれたら、「日本拳法の『基本』（拳の技、蹴り技、投げ技、関節技）こそが日本拳法だ」と答えます。つまり防具を着けて殴り合うのが日本拳法ではありません。また防具はどんどん変わっていきますが、基本は変わりません。ですから宗家澤山宗海先生が作られた基本を、日本をはじめ、広く世界に普及させていきたいと考えています。

個人としての目標は、現在まで49の大会で優勝していますので、50歳の時に大会に出て50勝目を挙げたいと思っています（笑）。

日本拳法は、総合格闘技で、毎日毎日実戦で遠慮なしに練習できますから、必ず強くなると思います。頑張るだけで簡単に強くなれる本当に素晴らしい武道なので、いろんな大学や道場で行っていただきたいです。日本拳法をすることにより、肉体的に強くなることは当たり前ですが、それに加えて、確実に精神的にも強い人間になることができるのです。

◎雑古哲夫プロフィール

1960年兵庫県生まれ。1976年高校入学と同時に日本拳法を始める。1980年～1982年全日本学生拳法選手権大会MVP。1982年大学4年生で全日本拳法総合選手権大会初優勝。以降1988年、1989年、1992年と計四回優勝。国際大会も1992年、1996年、1998年に優勝。以上を含め49の大会で優勝。現在、七段。関西大学第一高等学校拳法部師範、関西大学拳法部副顧問、日本拳法会昇段級審議会副議長を務めつつ、関西大学文学部教授として学生、後進の指導にあたっている